



火災ノ損害ト火災保険(1)

瀧谷, 善一

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 22(2):189-201

(Issue Date)

1917-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052653>



論

說

火災ノ損害ト火災保險 (其二)

神戸高等商業學校教授

商學士 瀧谷 善一

一

我國ニ於ケル火災ノ損害ハ素ヨリ精確ニ之レヲ知ルヲ得ズト雖モ、帝國統計年鑑(註一)ノ示ス所ニ據レバ其見積高大正二年度ニ於テ參千百拾六萬圓弱大正三年度(此年ハ火災ノ損害少カリシ年ナリ)ニ於テ壹千六百拾六萬圓弱ナリ。(臺灣、朝鮮、樺太ニ於ケル損害ハ此内ニ含マレズ)大正元年度以前ノ損害額ニツキテハ統計年鑑ニ記載ナキヲ以テ之レヲ知ルヲ得ズト雖モ、前記統計ニ掲ゲアル年々ノ罹災戸數竝ニ燒失建坪數ト前記兩年度ニ於ケル損害見積額トヲ對比スルトキハ我國ノ火災ノ損害ハ過去十數年間毎年貳千萬圓乃至參千萬圓

ナルベシト推測シ得ベシ。

重要都市ニツキテハ比較的古クヨリ火災ノ損害見積高ノ統計存ス。(但シ横濱市ノ如ク統計書ニコレガ計上ナキ都市モアリ)今左ニ過去數年間ノ年均ニヨリ重要都市ノ毎年ノ損害額及ビ其人口一人宛ノ損害額ヲ示サン。

市名	統計期間	總損害額 万円	一人宛損害額 円
東京市	自明治三七年至大正二年(十箇年平均)	二二四(建物)	一・二二(註二)
大阪市	自明治三八年至大正三年(十箇年平均)	二七五	二・二三(註三)
京都市	自明治三九年至大正二年(八箇年平均)	三一	六八(註四)
神戸市	自明治三八年至大正三年(十箇年平均)	四一(建物)	一・〇五(註五)

左ニ此レヲ外國ニ於ケル大都市ノ損害ト比較セン。

市名	統計期間	總損害額 万円	一人宛損害額 円
倫敦市	自明治三八年至大正三年(十箇年平均)	五二五	一・一二(註六)
紐約市	自明治四〇年至大正三年(八箇年平均)	一、八〇〇	三・六二(註七)
市俄古市	自明治四五年至大正四年(四箇年平均)	一、一四〇	四・六八(註八)
伯林市	自明治三五年至同四年(十箇年平均)	五〇(建物)	・二五(註九)
巴里市	自明治四五年至大正二年(四箇年平均)	三九三	一・三八(註八)

由是觀之、我國重要都市ノ一人宛火災損害ハ火災ノ大ナルコト世界ニ稀ナル米國ハ別トシ、歐洲諸國ノ首都ノソレニ比シ決シテ小ナリト謂フコトヲ得ズ況ンヤ我國ト此等ノ歐米諸國トノ間ニ國富ニ非常ナル差異アルニ於テヲヤ思ヲ一度此

ニ致サバ、我國ハ貧乏國ナルニ拘ラズ、歐米諸國ニ比シ國富ノ大ナル割合ヲ年々火災ノ爲メニ燒盡シツ、アルヲ知ルニ足ルベシ。世人ノ一顧ヲ要スル所ナルベシ。

前記ノ損害ハ火災ニ因ル財産上ノ直接ノ損害ナリ。之レニ火災ニ因ル財産上ノ間接損害即チ工場ノ燒失ニ因ル生産減少等ノ損害ヲ加フルトキハ其損害額更ニ大ナルモノアラン。

火災ノ災害ハ之ニ止マラザルベシ。我國ニ於ケル火災ニ因ル燒失家屋ハ大正三年度（此年ハ例年ニ比シ）ニ於テ住家二萬八千五百餘戸、非住家一萬六千五百餘戸内住家ノ全燒セルモノ二萬二千七百餘戸ナレバ（註）一家平均四人トスルモ此火災ハ少クトモ九萬人ノ住宅ヲ奪ヒタル次第ナリ。此等罹災者ノ中ニハ爲メニ粒々辛苦ノ財産ヲ燒盡シテ或ハ親戚故舊ニ緣リ或ハ路頭ニ迷ハザルベカラザルニ至ルモノアラン。更ニ不幸ナルハ火災ノ爲メニ若クハ消防救護ノ爲メニ生命ヲ失ヒテ親子夫婦ノ永別ノ悲ニ陷ル者ナリ。此等ノ統計ハ之レヲ得ルコトヲ得ザレドモ其數決シテ僅少ナラザルベシ加之大火ノ地方ヲ襲フヤ屢其市町村ノ廢頽ヲ來スコトナキニアラズ、火災ノ災害亦恐ルベキニ非ズヤ。

然ルニ火災ノ損害ハ文明ノ進歩、商業ノ發達、人口ノ都會集中ニ伴フテ増加ス

ルノ傾向アリ。從ツテ火災ノ豫防消防ノ策ヲ講ズルコトハ一日モ忽ニスベカラザル所ナリ。

余ハ此ニ防火政策ノ總テニツキテ論究セントスル者ニ非ズ。唯火災保險ト火災ノ損害トノ關係ニツキテ述ベント欲スルナリ。詳言スレバ火災保險ノ存在ガ火災ノ損害ヲ増加スルヤ將タ減少スルヤヲ檢シ火災保險ノ發達ガ國富ノ維持ニツキ國民經濟ノ利益ト一致スルモノナリヤ否ヤヲ研究セント欲スルナリ。

(一)内閣統計局編纂、日本帝國第三十五統計年鑑(大正五年十二月刊行)第五〇八—九頁。

(二)東京市統計年表ニ據ル。人口ハ各年十二月三十一日現在人口ヲ探ル。但シ四十一年以前ハ寄留簿ノ整理ナカリシ爲メ實際ヨリモ過大ノ數字ガ計上セラレ居レルヲ以テ(第十二回年表八七頁)假リニ四十二年末ノ現在人口ヲ以テ四十一年以前五年間ノ年末人口ト見テ前記ノ計算ヲ爲セリ。寄留簿ノ整理アリシ四十二年ヨリ大正二年マデノ毎一年人口一人宛ノ火災損害(建ノミ)ハ壹圓九拾六錢ナリ。

(三)大阪市統計書ニ據ル、人口ハ各年末ノ現在人口ヲ探ル。

(四)京都市統計書ニ據ル、人口同前

(五)神戸市統計書ニ據ル。人口同前

(六)損害見積高ニツキテハ一九〇五年(明治三十八年)乃至一九二二年(大正元年)迄ハ London County Council: Note-Book on the Fire Brigade, 3rd Ed. 1913.ニ據リ一九一三年及一九一四年分ハ London County Council: Report of the Chief Officer, London Fire Brigade for 1914.ニ據ル。人口ハ London County Council: London Statistics vol. 20 (p. 40) 及 vol. 23 (p. 54)記載ノ人口統計中戶籍總監ノ採用スル各年ノ中央ニ於ケル人口統計ヲ採リ。貨幣ノ換算ハ法定平價ニ依ル。

(七)Annual Report for 1914, Fire Department of the City of New York, 1915.ニ據ル貨幣ノ換算ハ法定平價ニ依ル。

(八)Proceedings of the Annual Meeting of the National Board of Fire Underwriters 1913—1916.ニ據ル貨幣換價同前。

(九)損害額 < Bericht über die Verwaltung der Feuerwehr von Berlin für das Etatsjahr 1911. > 據、人口 < Stateman's Yearbook
所載ノ一九〇〇、一九〇五、一九一〇年ノ人口平均ニ據ル、貨幣ノ換算ハ法定平價ニ依ル。

二

先ヅ第一ニ火災保險ガ如何ニ火災ノ損害ヲ増加スルヤヲ檢センニ、此惡影響ノ第一ハ被保險者ガ動モスレバ保險金詐欺ノ目的ヲ以テ被保險物ニ放火スルコトニヨリ生ズ。保險金ヲ詐欺センガ爲メニ故意ニ事故ヲ發生セシムルコトハ火災保險ニノミ伴フ弊害ニ非ズ。生命保險ニ於テモ、海上保險ニ於テモ例アルコトナリ。然レドモ生命保險ニ於テハ此種ノ犯罪ヲ爲サンガ爲メニハ多クハ自己ノ親近ヲ死ニ致サルベカラズ。而カモ死因調査ハ比較的嚴重ニ行ハル。然ルニ火災保險ニ在リテハ保險金詐欺ノ目的ヲ達センガ爲メニ破壊スベキハ唯財産ノミ。而カモ火災ノ原因調査ハ被保險物ノ燒失セル後ニ於テハ完全ニ行ハレ難キコト多シ。又海上保險ニ在リテハ船舶ノ場合ハ先ヅ別トスルモ個々ノ運送ニ依ル積荷ニツキテハ其保管ハ全ク第三者タル船長ノ爲ス處ニシテ被保險者ガ故意ニ保險金詐欺ノ目的ヲ以テ之レヲ沈沒セシムルコトヲ得ズ。反之火災保險ニ在リテハ被保險物ハ貸家及ビ倉庫會社ノ在庫品ハ別トシ、多クノ場合ニ於テハ被保險者ノ管理ノ下ニ在

リテ自己ノ一存ニテ何時ニテモ放火ヲ爲シ得ル地位ニ在リ。故ニ初メヨリ保險金額ガ被保險物ノ價額ヨリ大ナルカ、被保險物ノ價額ガ後ニ至リ保險金額ヨリモ小トナルカ、被保險者ガ其保險ノ目的タル建物又ハ商品ヲ持餘スカ、然ラザル迄モ資金缺乏ニヨリ現金ヲ得ルノ必要ニ迫ラレタルカノ場合ニハ火災保險ニ於テハ海上保險生命保險ニ於ケルヨリモ容易ニ故意ニ事故ヲ發生セシメテ保險金ヲ詐取セントスル恐アリ。勿論、保險者ハ被保險者ノ故意ノ火災ニ對シテハ損害ノ填補ヲ爲サレドモ(註二)保險者ガ被保險物ノ燒失シタル後ニ於テ其火災ガ被保險者ノ故意ニ出デタルコトヲ證明スルコト困難ナル場合多カルベシ。又保險者ハ被保險者ニ對シ實際ノ損害額以上ニ填補ヲ爲スノ義務ヲ有セザルコトハ各國ノ認ムル處ナレドモ、場合ニヨリテハ被保險物ガ全燒スルトキニハ其當時ノ價額如何ニ拘ハラズ豫メ定メタル保險金額ヲ全部支拂フベシトスルモノアリ(註三)例令然ラザル迄モ保險者ハ被保險物ノ燒失セル後ニ其火災ノ當時ノ價額ガ保險金額ヨリ僅カニ小ナリシ場合ハ勿論著シク小ナリシ場合ニモ(註三)其ノ證明ヲ爲シテ填補額ノ減少ヲ請求スルコト事實上困難ナルコト多カルベシ。故ニ不逞ノ輩ハ此保險者ノ舉證ノ困難又ハ被保險者ニ對スル法律ノ保護ヲ濫用シ又ハ法律ノ智識ノ缺點

ニヨリ敢テ放火ヲ爲スニ至ルナリ。

火災保險ノ此種ノ弊害ニツキテハ既ニ一八六七年ノ英國下院ノ火災損害ノ増加ニ關スル調査委員ノ報告書中ニモ見ユ即チ當時集メタル證據ニ依リ且ツ保險會社ニ關係セル人々ノ認容スル所ニ依レバ此頃火災數ノ増加セルハ幾分カ保險會社ノ競爭劇甚トナリ從ツテ保險會社ガ被保險物ノ引受、並ニ代理店ノ選任ニ注意ヲ拂ハズ、且ツ保險金ノ支拂ヲ容易ニシ時ニハ放火ナリト信ズル場合ニモ猶其保險金ノ支拂ヲ爲シ一般ニ保險會社ガカ、ル犯罪者ノ告發ヲ好マザリシニ因ルモノナリト(註四)今日ニテモ英國ニ於テ火災保險ガ放火ノ強キ動機ヲ與フルコトハワルドー氏ノ如キ此種ノ研究ニ通ゼル人ノ明言スル所ナリ(註五)

米國ニ於テハ保險會社ノ營業方針ノ不謹慎ナルモノアルト或州ニ於テ評價濟保險法(Valued Policy Law)ノ存在スルトガ他ノ事情ト相俟チテ放火ノ原因ヲ爲スコト一層甚シキガ如ク、或ハ單獨ニ或ハ團體ヲ作り巧ニ法網ヲ潜リテ保險金詐取ヲ業トスル者スラアリトイフ(註六) Underwriter Protective Agency of New York ノ Hines ノ言ニ依レバ同社ニハ過去三十年間百萬弗以上ノ大火ノ記錄ヲ有スルガ此内ニハ十九回各地ニ於テ姓名ヲ變ヘテ保險詐取ヲ營ミシ者アリトイフ。紐育州保險監督官

エメット氏モ數年前其年報ニ於テ保險金詐欺ノ爲メノ火災ノ損害多キコトヲ指摘シ、(註七)紐育市ノ現消防部長アダムソン氏モ亦米國ニ於ケル火災損害ノ大ナル原因ノ一ハ保險會社ノ營業ノ不謹慎ナル爲メ保險金詐欺ノ放火多キニアルコトヲ余ニ告ゲタリ。(一九一五年九月會談)

米國ニ於ケル保險金詐欺ノ爲メノ放火ノ割合ニツキテハ雜誌又ハ俗間種々ノ臆測ヲ爲シ、或ハ總火災數ノ二割五分ニ上ルトイヒ、或ハ三割三分ニ上ルトモイフ。The Insurance Monitor 誌、The Chronicle Fire Tables for 1885 ヨリ推シテ合衆國全體ノ火災ノ三割ハ犯罪的原因ニ出ヅルモノトセリ。(註八)然ルニ一八八九年ボストン市火災監察官ノ報告ニハ放火ヲ其動機ニヨリ分チ保險金詐欺ノ爲メニセルモノハ總放火數ノ四割ナリトセリ。故ニ假リニ此割合ヲ米國全體ニ適用シ得ルモノトセバ當時ニ於テ米國全體ノ火災總數ノ約一割二分ハ保險金詐欺ノ原因ヨリ生ゼシコトトナル。(註九)Atlas Insurance Company. ノ紐育支店長ロック氏ノ推算ニ依レバ此割合ハ約五分ナリトセルモ(註十)何レモ皆見込ヲ加ヘタル推算ニ過ギズ。蓋シ火災原因統計ニハ原因不明ノ火災數モ可ナリ多ク、此等ノ内ニハ放火モ可ナリ含マレ居ルコト一般ニ認メラル、所ナルヲ以テ總放火數スラモ精密ニ之レヲ知ルコト困難ナ

リ。況ンヤ保險金詐欺ノ爲メノ放火數ハ放火總數ヲ其動機ニヨリテ別チテ觀察セザルベカラザルニ於テヲヤ。

我國ニ於テモ保險金詐欺ノ目的ニヨル放火ハ時々新聞紙ニ散見スル處ナレド其如何程ノ割合マデ存在スルヤヲ知ルコト困難ナリ。帝國統計年鑑ニ依レバ最近六箇年(註十二)ノ火災總數ノ平均ハ一七、九五、四ニシテ此內放火數ハ一、二八、四即チ總火災數ノ七分二厘ナリ。此外雷火及ビ不審火ハ二、〇〇三即チ總火災數ノ一割一分二厘ニ上ル。此後者ニモ發見セラレザル放火ハ含マレ居ルコトハ一般ニ認容セラル、所ナリ。然レドモ他方ニ於テ放火ノ原因ハ甚ダ多シ。余ノ記錄ニ存スルモノ、ミニテモ(一)怨恨、復讐、威嚇、不平、惡感ニ因ルモノ(二)發狂、神經衰弱、亂醉、好騷癢、惡少年ノ行爲ニ因ルモノ(三)犯罪ノ實行又ハ罪跡湮滅ノ爲メニスルモノ(四)保險金詐欺ノ爲メニスルモノ(五)保險以外ノ利益(例ヘバ火災發見ノ賞金等)ヲ得ンガ爲メニスルモノ等アレバ、放火總數ノ幾何ガ保險金詐欺ノ目的ニ出デシヤヲ知ルコト困難ナリ。余ノ今日マデ行ヒシ調査ニ依レバ保險金詐欺ノ爲メノ放火數ニ關スル統計ヲ有セザル府縣モアリ。且ツ不審火中ニ幾何ノ保險金詐欺ノ放火ヲ含ムヤハ全ク之レヲ知り得ザルヲ以テ、保險金詐欺ノ爲メノ放火ガ總火災數ノ幾分ヲ占ムルカヲ精確ニ知ルコト

ヲ得ザレドモ、其割合ハ日本全國ヲ通ジテ觀察スレバ甚ダ小ナルベキヲ推定シ得ル根據アリ。

既ニ何レノ國ニ於テモ保險金詐取ノ爲メノ放火數スラ不明ナレバ此原因ニヨル損害額ハ勿論測知シ得ベカラズ。然レドモ放火モ天候其他ノ關係如何ニヨリテハ大火ノ原因トナルコトアルハ看却スベカラザル所ナリトス。

次ニ火災保險ノ火災損害ニ及ボス惡影響ノ第二ハ財産ヲ火災保險ニ附セル爲メニ被保險者ガ火ノ用心ヲ忽ニシ、又ハ失火ノ際ニ消防ヲ怠リ爲メニ火災ノ損害ヲ大ナラシムルコトナリ。此種ノ弊害モ亦放火ノ場合ニ述ベタルガ如ク被保險者ガ被保險物ノ燒失ニヨリテ利益ヲ受クルカ若クハ特ニ被保險物ノ安全ニ保存セラルハコトヲ欲スルノ理由ナキ場合ニ生ジ易キモノナリ。此種ノ損害ハ放火ト異リ特ニ人目ヲ惹ク事ナキヲ以テ看却セラレ易シト雖モ保險金詐取ノ目的ニヨル放火ノ損害ト其何レガ大ナルカハ未ダ俄ニ斷ズベカラズト稱スル者アリ。(註十二)

余ハ我國人ノ出火ニ對シテハ特ニ責任ヲ感ズルコト大ナルト未ダ火災保險ガ普及セラレザルトニヨリ、火災損害中被保險者ノ放火前記ノ性質ノ不注意又ハ消防ノ怠慢ニヨル損害ハ僅少ナリト考フルモ、而カモ火災保險ガ普及シ社會ニ對ス

ル責任ヨリモ自己ノ利益ニ重キヲ措ク自利心ノ増長スルニ從ヒ英米ニ於ケルガ如ク此種ノ弊害ガ増加スルナキヤヲ恐ル、モノナリ。殊ニ本邦商法第三百九十四條ノ規定ノ下ニ於テハ此種ノ弊害ヲ生ジ易シト思惟ス。當局者ノ研究監視ヲ忽ニスベカラザル所ナリトス。

凡ソ此種ノ弊害ハ火災保險ノ性質ニ固有ノモノニアラズ。其コレアルハ個人ノ出火ニ對スル責任ノ自覺少ナク社會ノ出火者ニ對スル制裁薄キト、法制、警察制度ノ不備ナルト、被保險者ノ無智ナルト相俟チテ又保險會社ノ營業方針ノ不合理ナルニ因ルコト甚ダ大ナリ。例ヘバ保險會社ガ保險契約ノ際、被保險者ノ人物信用ヲ深く顧ミズ、又ハ被保險物ノ性質ニ充分ニ考量ヲ與ヘザルガ如キ場合、保險代理店等ガ其手數料ノ多キコトヲ欲シ、保險會社モ亦保險料收入ノ多キコトヲ欲スル極、如何ハシキ被保險物ヲ引受ケ又ハ價格以上ノ保險ヲ引受クルガ如キ場合、保險會社ガ損害填補ノ際、火災ノ原因ノ調査ヲ忽ニシ又ハ罹災物件ガ眞ニ請求額丈ケノ價格ヲ有スルヤ否ヤノ調査ヲ寬ニスルガ如キ場合ニハ此種ノ弊害ガ生ズルコト多シ。故ニ保險會社ノ無謀ナル營業方針ガ此點ニ於テ社會ニ害毒ヲ流スノ恐アルベク、國民經濟ハ保險會社ノ合理的の經營法ニツキテ其富ノ保存上大ナル利害關

係ヲ有スルモノナリ。

(一) 保險者ハ被保險者ノ故意ノ火災ニ對シテハ損害填補ノ責ニ任ゼザルコトハ當然ノコトニシテ古クヨリ何レノ國ニ於テモ認メラル。處ナリ我國現行火災保險證券ノ普通約款モ其第十七條第一項ニ此旨ヲ明記セリ。

(二) 例ヘバ米國中評價濟保險法 (Valued Policy Law) ノ行ハル、諸州ニ於ケル保險契約ノ場合又ハ英國ニ於ケル家具保險 (Furniture Policy) ニ於テ見ル所ノ保險契約ノ如キ場合タイフナリ、我商法第三百九十四條ノ規定モ多少コレニ類スル場合ナリ。

(三) 我國商法第三百九十四條參照

(四) A. C. Campbell: Insurance and Crime, 1902, p. 160—161.

(五) City of London Fire Inquests; their History, Working and Results by F. J. Waldo, M.A., M.D. Cantab., of the Middle Temple, Barrister at Law. J. P., His Majesty's Coroner for the City of London and Borough of Southwark. 此講演 Journal of the Insurance Institute of London. vol. VI 1913. ニ掲載ナリ。

(六) Campbell, Ibid. p. 156—157.

(七) Annual Report of W. T. Emmet, Superintendent of Insurance, State of New York, 1912 (?)

(八) Campbell, Ibid. p. 150.

(九) Campbell, Ibid. p. 153.

(十) F. Lock: The Relation of Fire Insurance to Incendiarism, 1913, p. 10—15.

(十一) 日本帝國第三十五統計年鑑五〇八—九頁。統計年四十二年乃至大正三年ノ六箇年ノ數字ニ採リ其以前ノ數年ニ及バザリシハ統計表ニ表ハレタル四十一年以前ノ火災度數中ニハ直ニ消止メシ度數ヲ包含セズ從ツテ其以後ノ火災度數ト計算ノ基礎ヲ異ニスレバナリ。

(十二) Bissel: Rates and Hazards, Yale Reading in Insurance, Part II. Property Insurance, Rev. ed. 1914, p. 154.

火災保險ハ火災ニ因リテ被ルベキ損害ヲ多數人員ノ間ニ分擔セシメテ罹災者ノ損害ヲ輕減セントスル制度ナリ。此制度ノ存在ニヨリテ被保險者ノ經濟的現狀維持ガ保證セラル、ヲ以テ火災保險ハ企業ノ發達ヲ助長シ、金融ノ圓滑ヲ促シ、所得ノ安固調整ヲ齎シ、個人ノ窮厄ト都市ノ頽廢トヲ防グノ効益アル事ハ人ノ認ムル所ナリ。然レドモ此制度ハ元來、負擔ノ分配ニヨリテ罹災者ノ困難ヲ輕減セントスル一種ノ善後策ニ過ギズ。火災ニ因リテ被保險者ノ被レル損害ハ保險ニ依リテ填補セラル、トスルモ其損害ハ社會ヨリ觀レバ絶對的ニシテ復之レヲ恢復スルニ由ナシ、故ニ火災保險ノ存在ガ却テ火災ノ損害ヲ増加スルガ如キコトアラシカ上述ノ如キ火災保險ノ齎ス効益アルニ拘ハラズ社會ヨリ觀タル火災保險ノ効益ハ甚ダ疑ハシキモノトナルベシ、少クトモ大ニ割引セラレザルベカラザルベシ。余ハ前項ニ於テ火災保險ガ火災ノ損害ヲ増加スベキ危險アルコトヲ說ケリ。火災保險果シテ火災ノ損害ヲ減少スルノ効果ナキヤ、火災保險會社ノ過去及ビ現在ニ於ケル火災防止上ノ貢獻ヤ如何。火災保險會社ノ私的利益ト社會ノ公的利益トハ如何ナル方法ニ於テ調和セラルベキヤ、是レ次ニ說カントスル所ナリ。(未完)